

# 共創のアプローチ 概要

参考資料4

## 有識者懇談会

### 参加者

学識経験者、民間事業者、市長、両副市長、部局長等



- 「高齢者」「地域経済」「子ども・子育て」といったテーマでの懇談会を開催。
- 毎回、全国で活躍する有識者を招へいし、市長、両副市長及び関係部局長出席のもと、テーマに関する本質的な議論を行う。

## 共創のアプローチ

### 参加者

市民、市民団体、行政(関係課担当者)等



- 市民や行政などのステークホルダーが、具体的な事象を対話と体験(インタビューやセッション等)を通じて理解し、ありたい姿を共有
- 上記を通じて、課題解決策の仮説を生み出して実験し、学びを深め、そこから得られた学びと気づきを計画策定に連動

### 見えてきた気づき・課題

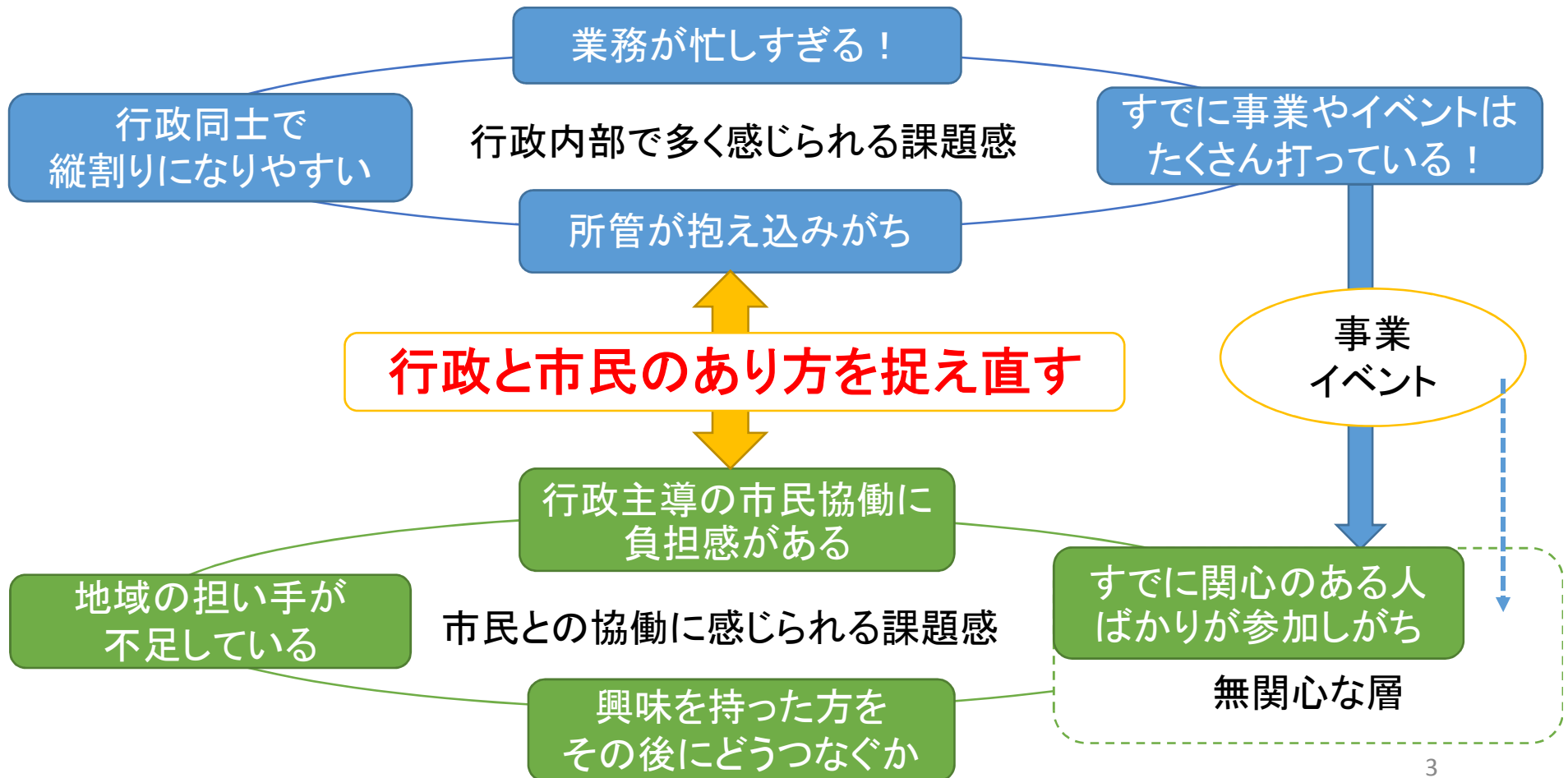
- 分断(縦割り行政など)をつなぐ
- これまでの取り組みの進化
- 民との連携(官民連携)
- アクション生成 等

後期基本計画の柱(戦略)

# 1 なぜ共創のアプローチを行うか

# 1 ー(1)背景にある課題感 行政と市民のあり方を捉え直す

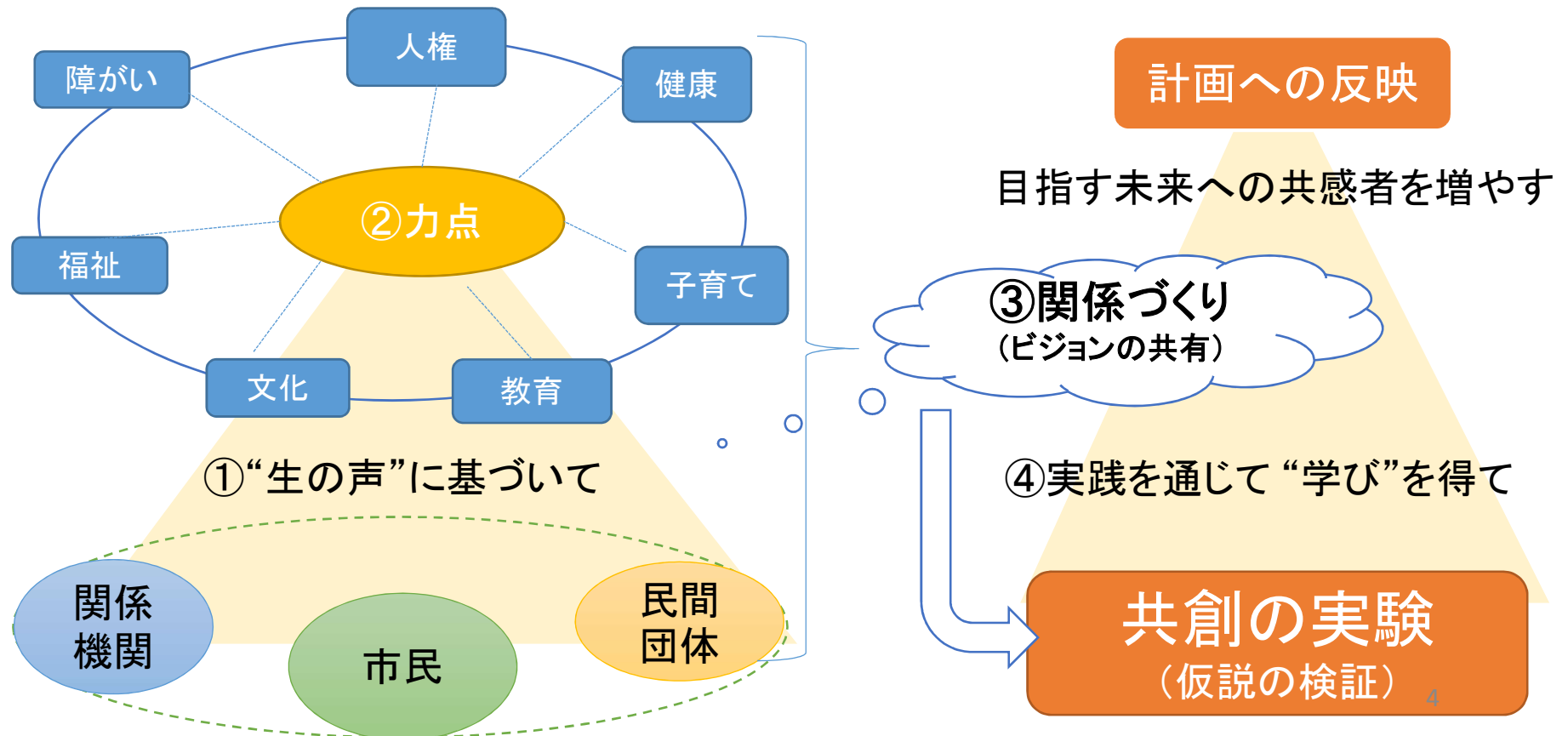
- 厳しい財政状況の中で、市民と協働のまちづくりを加速させていきたい。
- しかし、業務が過大になり、他課や民間との連携がうまくいっていないのではないか。
- 行政が抱え込んでいた役割を振りかえり、これまでの行政と市民のあり方を捉え直してはどうか。
- 後期基本計画そのもの(What)ではなく、計画の進め方・連携のあり方(How)に学びを得よう!



# 1-(2) 取組の目指す価値

# 計画策定のプロセスを通じてつながる

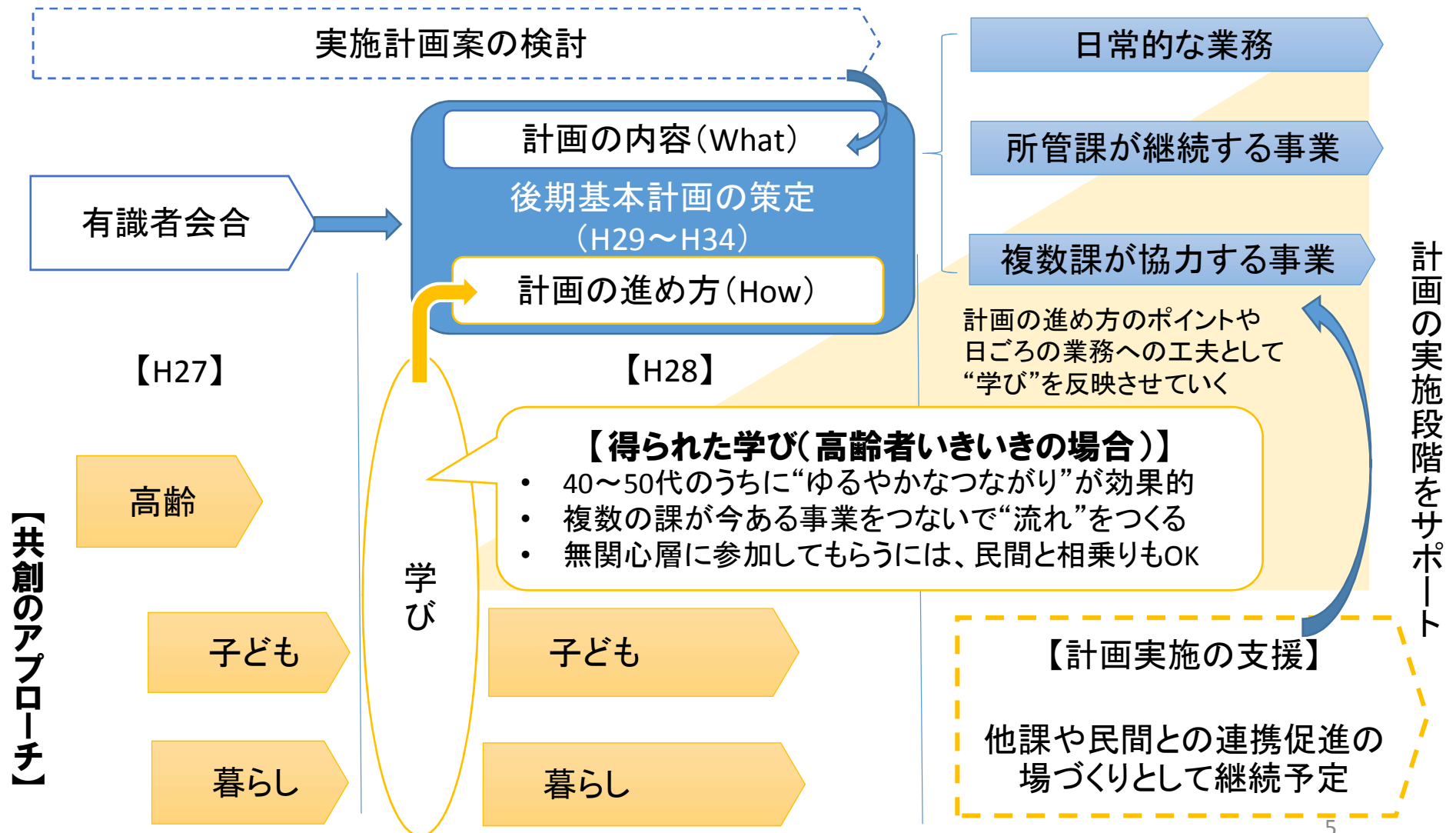
- ①市民や関係者の実感や背景などの“生の声”に基づいて
- ②横断的な議論から、行政の力点(仮説)を見つける
- ③計画策定を通して共感を広げ、行政と民間の関係をつくる
- ④実験を通じて、現場で共に一歩踏み出すことで学びを得る



# 1-(3) 取組の目的 計画を動かす現場に生きる“学び”を得る

目的(1) 得られた学びを後期基本計画の進め方(How)に反映させること 【計画策定期】

目的(2) 計画を動かすにあたって各現場で活かせる“学び”を得ること



## 2 取組の内容

## 2-1(1) 平成27年度の流れ

平成26年度のWe-MAPを受け、平成27年度から“共創のアプローチ”を3テーマ開始した

We-MAP  
若手による検討  
(テーマ出し)

【4月】

【10月】



“高齢者がいきいき暮らすまち”

【モデルケース】  
共創のアプローチの手法開発

1月～3月

共創の実験  
【食と健康セミナー】

### 【メンバー構成】

- ・高齢介護課
- ・健康づくり課
- ・地域政策課
- ・生涯学習課
- ・防災対策課
- ・職員課
- ・生活支援課

### 【事務局】

- ・企画政策課



“子どもの育ち”

### 【メンバー】

- ・子育て政策課
- ・保育課
- ・青少年課
- ・人権・男女共同参画課
- ・教育指導課
- ・教育総務課
- ・文化政策課
- ・健康づくり課
- ・障がい福祉課
- ・生活支援課



“小田原の暮らし”

### 【メンバー】

- ・産業政策課
- ・農政課
- ・観光課
- ・水産海浜課
- ・都市計画課
- ・文化政策課
- ・開発審査課
- ・秘書室
- ・生活支援課

## 2-(2) 共創のアプローチの全体像

### (1) 現場に飛び込み、市民を深く理解する

#### ①テストインタビュー

: 家族や身近な人へのインタビュー

#### ②市民インタビュー

: 市民や様々な関係者へのインタビュー

### (2) 多様な人たちの対話から仮説を立てる

#### ③市民ミーティング

: 多様な世代や立場の人たちが集まって  
大切にしたいポイントを語るワークショップ

#### ④システム図の検討

: 全体を俯瞰して、好循環や悪循環を捉え、  
力点とすべきポイントについて仮説を立てる

### (3) 仮説の実践を通じて官民のネットワークを紡ぐ

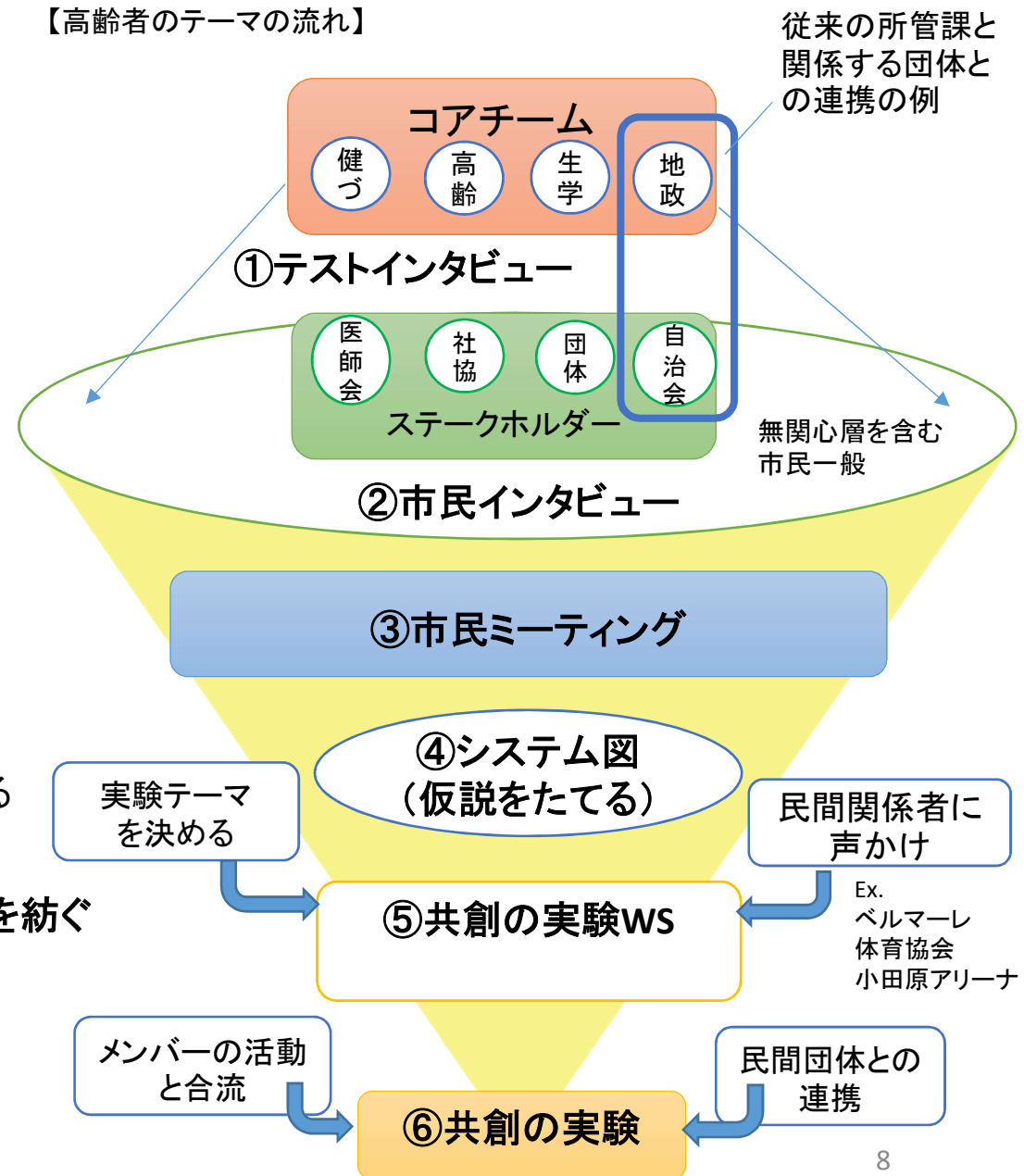
#### ⑤共創の実験ワークショップ

: 様々な民間関係者と実験のアイデアを練る

#### ⑥共創の実験

: 仮説を検証する実験を民間と行う

【高齢者のテーマの流れ】





## 2-(3) 市民インタビュー

## 現場に飛び込み、市民を深く理解する

メンバーそれぞれが紹介し合い、様々な世代の市民や異分野の関係者などに話を聴いた

### ① アンケートだけでは見えない市民の背景を知った。

- 「子育て支援センターでは、“〇〇ちゃんママ”なので気疲れする。」など、市の事業等を利用しない人の本音が聴けた。
- 「よく会う関係者だが、相手の福祉施設には初めて行った」など所管の職員も、現場に行くことで新たな発見があった。



### ② 職員が日頃は関わりのない市民や関係者と出会った。

- 職員課職員が、生活保護受給者の孤立した生活に驚いた。
- メンバーが互いに紹介し合うことで、小学校長や自治会長、東京からの移住者や農家など、多様な視点の話を聴けた。
- 1時間ほど話を聴くことで、気軽に話せる信頼関係ができた。



### ③ ひとりの人のライフステージまで遡って捉えなおした。

- 50代で託児ボランティアをしている理由は、30代の頃に地域の人から子育てを助けられた体験からだを知った。
- 行政は「シニア」世代に向けて各事業をPRすることが多いが、参加のポイントは40～50代で誘い合える仲間がいることだった。



## 2-(4) 市民ミーティング 多様な人たちの対話から仮説を立てる

30～70人が自分の体験を語り合い、実現したい未来に“大切にしたいこと”を話し合った。

### ● 世代や分野を超えて様々な人が出会った

- インタビューに共感した市民が、まちづくりへ一歩踏み出した。
- 行政、事業者、市民活動団体、学生など世代や分野を超えて様々な人たちが出会い、刺激を受け合った。



### ● 様々な立場の人の体験で、議論が深まった

- 1人の体験を語り合って共通するポイントや課題が見えてくることで、目指したい未来についてのビジョンを共有した。
- 自分や家族など身近な問題として語ることで、行政への要望ではなく、“自分ゴト”として参加する意欲が高まった。



### ● つながりから実現できそうな期待が高まった

- 自分の体験をじっくり聴いてもらうことで、初めて会った人同士にも信頼感が生まれた。
- 参加者個人や一団体では実現できないことも、様々な分野の人たちと協力することで実現できる期待感が高まった。

ex.小田原アリーナスタッフと、包括支援センター職員が出会った



“40代～50代のうちのゆるやかなつながりが、高齢者いきいきのポイント”という仮説を検証するため、(一社)日本予防医療協会と共催で「食と健康セミナー全3回」を開催している。

### ● 40～50代に情報を届けるために飲食店と協力

- 小田原産の野菜等の試食会を催すことで、自然食レストランやスーパー、ヨガ教室等がチラシを置くなど協力してくれた。
- 有機野菜をつくる農園レストランや味噌職人が、試食会の食材購入をきっかけに、食材についての講演を引き受けてくれた。



### ● 民間団体が主体となり講座の魅力が高まった

- 日本予防医療協会が主体となることで、1,000円の参加費で大盛りサラダやワインなどの魅力が加わり、約60名の反響があった。
- 健康づくり課の血管年齢測定や、小田原アリーナ講師のウォーキング講座により、生活習慣の見直しへ相乗効果が生まれた。



### ● 健康という共通の目的をもった仲間が生まれた

- 健康講座にワークショップの要素を取り入れ、参加者同士が健康の悩みや目標を語り合うことで、仲間意識が生まれた。
- 講座後のアフターパーティでの気軽な会話や、レストランでのミニ講座などで“定期的集りたい”という声があがっている。



### 3 共創のアプローチの展開

## 3-(1) 共創のアプローチの効果

後期基本計画に反映させる仮説(大切にする点)と、計画を実現するための“学び”を得た

### ● 各課の共通の課題に対して“学び”を得る

- 各課が共通の課題であった40～50代へのアプローチ方法について、“食”の魅力で参加を促せることが分かった。
- 庁内の横断的な協力関係や、市民の共感者が広がることで、“口コミ”によって新たな参加者層の開拓ができた。

ex.健康づくり課から各健保への周知により市内外の企業で供覧された。



### ● 検証した仮説やノウハウを各現場に活かす

- スポーツや市民活動などへの参加を促すために、“ゆるやかなつながり”が有効であるというポイントが見えてきた。
- NPOやスポーツ施設、民間の店舗等の様々な関係が生まれたことで、今後の行政の取組への協力が期待される。



### ● 各課で独自の実験的な取組を試みている

- 生涯学習課がパパ向けに企画した講座について、“ゆるやかなつながり”をつくる工夫を加えた新たな試みした。
- 健康づくり課が、関わりにくかった働き盛りの世代に対して、企業の健康保健組合と連携して、出張講座を実施した。



## 3-(2) 今後の取組の方向性

“子ども”や“暮らし”のテーマの実験や、庁内外の横断的な議論の場での活用を検討する

### ● 子どもの視点で“居場所”をテーマに実験

- 子ども中心の“子育て”の視点に立ち、「子どもの居場所は、親もつながる地域の居場所になる」といった仮説を検証する。
- “居場所”をテーマに、子どもを地域で育てる居場所や、親が心の余裕を取り戻せるコミュニティづくりなどを実験する。



### ● 小田原の暮らし(価値) を持続可能に

- 「小田原に自分ゴトとして関わる人が増えると、小田原の上質な暮らし(価値)が持続可能になる」といった仮説を検証する。
- 市民向けの小田原を知るツアー等を実験しつつ、異分野の産業界との自立・連携や、行政との関係性を模索していく。



### ● 平成28年度からの共創のアプローチの展開

- 子ども、暮らしの両テーマの共創の実験を各課で連携して進めながら、仮説の検証と後期基本計画を動かす“学び”を得る。
- 実験で検証した仮説を、後期基本計画に反映させる。
- その他に庁内の横断的な議論や、市民協働を促進したい取組等について、共創のアプローチを応用してサポートしていく。

